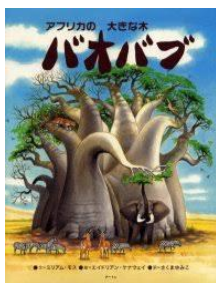


アフリカの大きな木 バオバブ

ミリアム・モス / 作
 エイドリアン・ケナウェイ / 絵
 さくまゆみこ / 訳
 アートン (2006.8)

乾いた地面から芽を出し、大きく根を張るのは、アフリカ大陸に育つバオバブの木。小さな虫たちがすむ根は水を吸い上げ、幹はそれを蓄える。広げた枝は日差しをさえぎり、木陰ではインパラが跳ね、水牛が休む。嵐にも耐え、ゾウはかたい実と種を、人やカメレオンは虫を食べる。鳥は巣作り、サルは枝で遊び、夜は木の下でヒョウの目が光る。



年輪がなく、推定数百年生きるとされるバオバブは、人間や動物に生活する場を与え、アフリカを象徴する木としてたくさんのお話にも登場します。

そんなバオバブを中心に、自然環境の厳しいサバンナと動物を色鮮やかに、ダイナミックに描いた作品です。

巻末にバオバブの解説と地図があり、アフリカを知るのにおすすめの1冊です。

おばあちゃんのえほうまき

野村たかあき / 作・絵
 佼成出版社 (2010.1)

テーマは「節分」。どうして玄関先にイワシの頭を飾るのか、なぜ節分に恵方（えほう）を向いて太巻きずしを食べるのか、そもそも太巻きずしには何の意味があるのでしょうか。



物語は節分に関するいろいろな疑問をおばあちゃんと孫が太巻きずしを作りながら、やり取りをして進んでいきます。版画ならではの味わいある絵は、家庭で行事食を作る楽しさと、みんなで一緒に食べるうれしさがよく伝わってきます。

もちろん、「おにはそと。ふくはうち」豆まきの場面も描いてあります。

受け継がれていく伝統行事には、地域それぞれの方法がありますが、まずは「節分って何？」を知るのに最適の1冊でしょう。巻末に恵方巻きレシピ付きです。

からだのなかでドゥンドゥン

木坂涼 / 文 あべ弘士 / 絵
 福音館書店 (2008.12)

ほら、聴いてごらん。耳を胸につけると聞こえてくる「ドゥンドゥン」。犬のコロはトゥクン、猫のミーコはウクン、トカゲも、鳥も、ラッコも、クマも、そして海にいるクジラも、体の中で音がする。



「体の中でドゥンドゥン それは命の音だよ」タイトルの「ドゥンドゥン」とは、生きている証し、心臓の音。その音をテーマに小さな子にも分かるよう、どの動物もそれぞれの居場所で生きていることを描いています。絵は旭山動物園で飼育係として25年間勤務していたあべ弘士氏。

色彩豊かな動物の表情や躍動感あふれる絵からは生きている力を感じます。自分の体の中から身近な人、やがて空、森、土、山、海の中で生息する動物までが登場し、あらゆる地球上の動物の存在を感じることができる絵本です。

かわ

鈴木のりたけ / 作・絵
 幻冬舎 (2010.7)

この絵本は、写真のようになりアルで精密な絵と、その名称もきちんと書きこまれていることが特徴です。



降り注ぐ雨が川の流れと共に源流から溪流へ、上流・中流・里川・湖・池・沼・用水路・田んぼ・下流・河口、やがて海へと流れこむ様子を作家の味付けで仕上げた作品です。

最初の絵は、青空に雲と静かに始まりつつ、水の流れと共に、接写したかのような川の中の様子から海へ、最後の海の場面では視界が開けるような感覚になり、自分が小さな雨粒だったように思えます。物や魚の視点で見えるもの、また水の透明感にも注目してみてください。

専門的に生態系を描いたものではありませんが、「川」を総合的に扱った知識絵本として、もの探しの面白さなど楽しめる要素の多い作品です。

ガンバレ!! まけるな!! ナメクジくん

三輪一雄／作・絵
偕成社 (2004.11)

子どもの頃、ナメクジに塩をかけてみた経験はありませんか。一方、同じようにヌルヌルしているものの、カラを持つカタツムリはみんなの人気者ですね。



この本では、まず似た者同士のナメクジとカタツムリの生態がわかりやすく説明されています。そして、嫌われ者のナメクジにスポットライトをあてて、カタツムリと比較しながらその進化の過程が描かれています。

進化の経緯を説明するだけにとどまらず、想像力豊かにナメクジの心境を代弁しているところがとてもユニークで、作者のあたたかい愛情が感じられます。「ガンバレ!! まけるな!! ナメクジくん」、題名どおりのナメクジ応援歌のような1冊です。

最後のページにある「ナメクジ通信」を読めば、ナメクジ博士になるかもしれませんよ。

キュッパのはくぶつかん

オーシル・カンスタ・ヨンセン／さく
ひだにれいこ／やく
福音館書店 (2012.4)

キュッパは、いろいろなものを拾い集めるのが大好きな丸太の男の子です。ガラクタのようにしか見えないものもキュッパにとっては大切なもの。家に帰ると、一つ一つ百科事典で名前を調べ、分類し、ラベルをつけ、それぞれの箱や引き出しにしまいます。



ところがある日、箱も引き出しもいっぱいになってしまいます。さあ、どうしたらいいのでしょうか。キュッパは、物知りのおばあちゃんに相談します。そしてみんなに見てもらえるよう博物館をつくることにします。最後には…

寒色系の落ち着いた色使いで、細かく丁寧に描かれたキュッパのコレクションを見ていると、こんなものまで拾ったの! と楽しくなってきます。

集めたものを丹念に調べ、分類し、ラベルを付け、きれいに分かりやすく展示し、記録に残す。好奇心旺盛で、一生懸命なキュッパと一緒に博物学について学べる絵本です。

きらきら

谷川俊太郎／文 吉田六郎／写真
アリス館 (2008.11)

雪の結晶のみで構成された小さな写真絵本。

背景の濃い青色に透明な雪の結晶が美しく映え、語りかけるようなやさしい言葉が添えられています。



「きれいだね てんからおちてきた ほしみたい たべたいな なめたらあまいかな？」

ふしぎだね みんなそっくり ろっかくけい きれいだね でもおかねでかえない ゆびわにできない」

寒い空から降ってくる冷たい雪を感じる時、雪に形があることがわかるでしょう。体験こそ何ものにも代えがたい経験です。

こいぬがうまれるよ

ジョアンナ・コール／文
ジェローム・ウェクスラー／写真
つばいいくみ／訳 福音館書店 (1982.11)

「いいこと おしえてあげようか?」「おとなりのいぬにあかちゃんが うまれるの。いっぴき わたしが もらうんだ!」

1匹のおなかの大きなダックスフンドの出産。犬の誕生の瞬間から、母犬から離れてひとり立ちし、女の子にももらわれていくまでの2か月間の子犬の成長を丁寧に追った写真絵本で、日本では1982年に出版されました。



出産という生命誕生の神秘。生まれたばかりで、目も見えず、耳も聞こえないのに、おっぱいの飲み方は知っているという本能にたくましさを感じます。また、子犬に寄り添っておっぱいをあげる母犬からは愛情が感じられ、そんな母犬のそばで安心しきっている子犬の姿にはほのぼのとさせられます。

早く一緒に遊びたいと待ち遠しくて仕方のない気持ちが前面に出ている女の子の語り言葉と、モノクロの写真が印象的です。

しごとば

鈴木のりたけ／作
ブロンズ新社（2009.3）

美容師・自動車整備士など、そこに働く人々の様子が写真のような精巧な絵で細やかに描かれています。まるで自分がその場にいるような臨場感を味わうことができ、子どもだけでなく大人も一緒に楽しむことができる1冊です。



ページの見開きいっぱいに見る専門道具や仕事場は、私たちが普段見ることのできない聖域であり、職人のプライドや迫力さえも感じられます。その反面、前のページで紹介された「新幹線運転士」が、次に紹介される「すし職人」の働くお寿司屋さんで食事をしていたり、「歯医者」が「パティシエ」のケーキを買いにきたりと、遊び心も満載です。

シリーズ第2弾「続・しごとば」ではプロ野球選手や宇宙飛行士、第3弾「続々・しごとば」では女優や看護師などが紹介されています。

しずくのぼうけん

マリア・テルリコフスカ／作
ボフダン・ブテンコ／絵
うちだりさこ／訳
福音館書店（1969.8）

「ある すいようびのことだった むらのおばさんのバケツから びしゅんと みずが ひとしずくとびだして ながいたびに でた ひとりぼっちで たびに でた」。詩を口ずさむような軽快な語り口によって、「しずく」と一緒に旅に出てみましょう。



きれいな好きな「しずく」がほこりで汚れてしまい、きらきらしていた元の姿に戻るため洗濯屋や病院へ行きます。ところが、そこから逃げ出して泥水にはまり、やがて太陽に照りつけられて水蒸気になります。そして、雲にたどり着いたと思ったら雨になって地面に落ち、夜の寒さに耐えきれず氷のかげらになってしまい…。

まだまだ続く「しずく」の冒険は本を読んでのお楽しみ。水が水蒸気や氷へ変化する様子を科学と芸術が一体になって描き出しています。目鼻と手足がついた「しずく」の絵など、ユーモアに満ちあふれています。

しめかざり

森須磨子／文・絵
福音館書店（2010.12）

お正月になると、家々の門や玄関にしめかざりが飾られます。これは「年神様」というお正月の神様を家にお迎えするために、年神様は新年を元気に過ごすための力を授けてくれるといひます。



この本では、日本各地のしめかざりを調査・研究している作者ならではの視点で、地域によって異なるさまざまなしめかざりを知ることができます。しめかざりの詳しい作り方やそれぞれの形に込められる人々の思い、「飾り」一つにも意味があることなどを、細かく丁寧な絵と分かりやすい解説で描いています。

色鮮やかな赤色を背景に、大きく描かれたしめかざりの表紙は印象的で、新年の始まりのりりしさが伝わってくるようです。

日本古来の素晴らしい伝統を知ることができる1冊です。

しゃっくり 1かい 1びょうかん

ヘイゼル・ハッチンス／作
ケイティ・マクドナルド／絵
はいじまかり／訳 福音館書店（2008.9）

「1びょうかんってどんなじかん？しゃっくり1かいするじかん」「1ぷんかんなら…」「1じかんだと…」どんなことができるでしょう？



子どもたちにはわかりにくい「時間」という概念を、身近な遊びや出来事など、実感できる体験を通して伝えます。

「あたらしい1にちはからっぽのリュック」
「たいくつな1ちに、どきどきする1にち。7つあればいろんな1にちがある」

詩的な美しい言葉と優しい色合いの絵でつづられる子どもたちの「時間」。

1日、1週間、1月、1年…まだまだ続く「時間」の中で、変わっていくもの、変わらないもの。「時間」の旅は、子どもたちだけでなく、私たち大人にも大切なことを気づかせてくれるかもしれません。

しょうたとなっとう

星川ひろ子・星川治雄／写真・文
小泉武夫／原案・監修
ポプラ社（2003.11）

主人公のしょうたは納豆が大嫌い。そんなしょうたを、農業を営むおじいちゃんが畑に誘います。二人でまいた青大豆の豆が枝豆へと成長し、枯れたさやから収穫した大豆が、おじいちゃんの手によって納豆へと変身する…その過程を丁寧



に追った写真絵本です。おじいちゃんの方言や孫を見つめるやさしいまなざし、しょうたの無邪気な表情に心が和みます。

今の子どもたちにとっては、わらづとを使った納豆作りどころか、枝豆と納豆が同じ大豆からできることすら驚きなのではないでしょうか。きっと、しょうたとおなじように大豆の変身に目を輝かせることでしょう。

自然の恵みの尊さ、日本の伝統食のすばらしさを感じることができる作品です。

図解絵本 東京スカイツリー

モリナガ・ヨウ／作・絵
ポプラ社（2012.3）

2012年5月に開業したスカイツリー。行った人もまだの人も、誰もが楽しめること間違いなしの「公認」絵本の紹介です。

驚きなのは、写真ではなく、全てが詳細な絵と説明文で構成されていること。スカイツリーの構造、秘密、工事の過程、現場で働く人の様子まで、楽しく図解されています。



建設現場の精密な描写に添えられた、取材中の著者自身を描いたイラストがほのぼののしていてユニーク。眺めるだけでもよし、細かい書き込みを隅々まで読みつくすのもよし。ページを開くたびに新たな発見があり、読み手を飽きさせません。

日本の最先端技術の素晴らしさ、そこに携わる人々のすごさを実感し、大人も子どももワクワクできる1冊です。

竹とぼくとおじいちゃん

星川ひろこ、星川治雄／著
ポプラ社（2008.11）

1年生のつばさくんは、おじいちゃんにうら山の竹林に連れて行ってもらいました。竹の子の食べごろは50㍻くらいであること、雨が続くと1日に約1㍻も伸びること、食べられるだけでなく道具にな



ったりすることなど、おじいちゃんから聞かされる話は、つばさくんにとっては驚きの連続です。

そんなある日、こっそりとおじいちゃんちの「なや」を探検に行ったつばさくんが見たものは…。田舎の季節ごとの風景や農作業の様子、そして生活の中のさまざまな場面で使われている竹の役割が鮮やかな写真で記録されています。その中でも、竹の子が伸びていく様子を描いたページでは、ちょっとした工夫がなされています。

竹の成長を通して、つばさくんとおじいちゃんの心温まる様子がつぶさに見られる写真絵本です。

チリメンモンスターをさがせ!

きしわだ自然資料館 きしわだ自然友の会
日下部敬之／監修
偕成社（2009.7）

ちりめんじゃこに入っている小さな海の生き物、通称「チリメンモンスター（チリモン）」を紹介した知識絵本です。内容はチリモンをはじめ、海の生き物の紹介、ゲームや解説で構成されています。



「チリモン探し」ゲームには楽しい写真があり、ステータジが上がるごとに難易度も増します。絵や写真をふんだんに使った解説は分かりやすく、実際に顕微鏡を使った観察の仕方、ちりめんじゃこができるまでなど、興味深い内容も盛り込まれています。調べるのに便利な「チリモンカード」も付いています。

「観察→理解→海の生態系への理解→生き物を食べることの大切さ」という流れで、チリモンが暮らす海の環境から次第に興味広がっていきます。

生活のなかの科学の芽（目）が育つような創意と工夫にあふれた1冊です。

とりになったきょうりゅうのはなし

大島英太郎／作
福音館書店（2010.6）

恐竜の本は、昆虫や動物の本と並んで子どもたちにとっても人気があります。大昔の生き物である恐竜も、子どもたちにとっては犬や猫と同じくらい身近な生き物なのではないでしょうか。



この本のお話は、博物館などにある大きな恐竜の骨の化石から始まります。そして、見上げるほど大きな恐竜ばかりではなく、羽毛の生えた小さな恐竜がいたことや、木の上で暮らすようになったその子孫が鳥の遠い祖先であることなどがわかりやすく述べられています。

近年の発見や研究をもとに描かれた、科学絵本。本を閉じる頃には、普段何気なく目にしているスズメやカラスが、今までとはちょっと違った生き物に思えてくるかもしれません。

なつのかわ

姉崎一馬／著
福音館書店（1988.5）

「かわーもりにうまれ、うみにむかう。」



朝もやがかかった森の写真に添えられた、この絵本唯一の文章。この一文通り、森から湧き出た水が小さな川となり、だんだん大きな流れとなって、海へたどり着くまでを追った写真絵本です。

川の流れの一瞬を捉えたどの写真からも、なんとも言えない涼しさが感じられます。森を流れる川の写真は、木々の緑がまぶしく、清らかな水の流れに心が洗われます。川で遊ぶ子どもたちの写真からは、楽しい様子が伝わってきます。きれいな川の写真を見ていると、今、どこに行けば、こんな美しい自然に出会えるのだろうか…と考えさせられます。

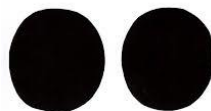
著者は、日本の森や野生の樹木の貴重さ、美しさを伝えたいと、自然を博物誌として捉える自然写真家で、代表作に「はるにれ」などがあります。

はなのあなのはなし

やぎゅうげんいちろう／作
福音館書店（1982.12）

表紙に大きな鼻の穴。本を開くと「はなのあなをしっかりとふくらましてよんでください」の文字が目に入ります。

はなのあなのはなし



鼻の穴の役割が、おもしろい絵で分かりやすく描かれた絵本で、子どもたちは読み進めながら、自分と他人の鼻の穴の大きさを比べたり、動物の鼻の穴の仕組みに驚いたり…。本をまねしてみんなで鼻をつまんでしゃべってみるなど、読みきかせにもお薦めです。

科学や人体を解説した絵本を多数手がける著者の作品には、思わず笑ってしまうお話の中にも、なるほどと納得させられる内容が次々と出てきます。

子どもは3歳頃から自分の体に興味を持ち、あれこれ知りたがり始めます。体について正しく知ることは、知識として役に立つだけでなく、子どもたちの興味を満たし、心を豊かにしてくれることでしょう。

ぼぼあちゃんなんでもおこのみやき

さとうわきこ／作
福音館書店（2009.2）

いつも明るく行動的、どんなことにも好奇心旺盛なおばあちゃん、「ぼぼあちゃん」が活躍する人気シリーズ。「なんでもおこのみやき」では、子どもたちと一緒にいろいろなバリエーションのお好み焼き作りに挑戦です。



生地の上に具材を乗せて焼くもの、全て混ぜてから焼くもの、薄く伸ばした生地をくるくる巻いて食べる甘いもの…？実はこれはクレープ。残った生地はクッキーにアレンジして…と、みんなの「お好み」で自由に楽しく焼き上げる品々は確かに「お好み焼き」。

巻末にはレシピもついていて、読めば作ってみたくなること間違いなし！楽しくておいしいぼぼあちゃんレシピの数々は、子どもたちのおなかだけではなく好奇心も満たしてくれることでしょう。

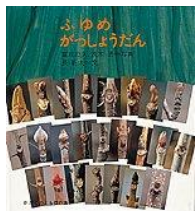
ふゆめ がっしょうだん

富成忠夫、茂木透／写真
長新太／文
福音館書店（1990.1）

おにぐるみ、むくのき、からすざんしょう…など、たくさん
の木の芽の冬姿を拡大した写真
が並ぶかがくえほんです。

「ふゆめ（冬芽）」は、一つ
ひとつが個性的で、帽子をかぶ
った子どもやウサギ、コアラと
いった動物の顔のように見え
ます。これは落葉した葉の柄が付
いていた跡だそうですが、泣いた顔・笑った顔・
怒った顔などがとても表情豊かに写し出されてい
ます。また、それぞれの写真の下には、軽快な言
葉がリズムカルに心地よく刻まれ、本当の合唱団
の歌声が聞こえるようです。

春が待ち遠しい季節、少しだけ元気を出して近
くの公園などに出かけてみてはいかがでしょう
か。春を待つ、とてもかわいい不思議な合唱団に
出会えるかもしれませんよ。



ほんとのおおきさ 恐竜博

真鍋真／監修
Tyler Keillor・徳川広和／造形
いずもり・よう／絵 川嶋隆義／写真
寒竹孝子／文
学研教育出版（2010.7）

精巧な恐竜の造形とやさ
しい言葉で解説した「あ
んない板」が特徴の恐竜の
本。あたかも「恐竜博」を
訪れたようなつくりになっ
ています。

発見された化石を研究
し、復元した実物大模型の
恐竜写真と一緒に、個々の
恐竜に関する情報が「あ
んない板」に記されています。拡大写真がその恐
竜のどの部分にあたるのか、その恐竜の大きさ
や生きていた時代と場所に加え、名前の由来や
特徴などが記されています。恐竜の姿だけでなく、
歯やウンチ、卵や子どもまで“展示”され
ていて、自然に興味を持てる構成になっていま
す。

専門用語を避けた分かりやすい説明は、子
どもの恐竜ファンでも多くのことを知ることがで
きるでしょう。1ページごとに収められた写真
と文字の隅々まで楽しむことができる恐竜本で
す。



みずたまレンズ

今森光彦／作
福音館書店（2008.3）

雨粒のゆくえをていねい
に追った写真絵本です。

「あめがはじめてつぶに
なる。」

「くものすにいっぱいひ
っかかったあめのつぶ。」

「あじさいのはなにこぼ
れたあめのつぶ。するす
るとすべっておちてたまになった。」

水がはじける様子を見るのも不思議、虫の視線
で水の玉を見るのも新鮮、水の玉をレンズに見立
ててのぞいてみるのも驚きです。

レンズの向こうで反転している様子は、普段じ
っくり観察しないとわからないもの。雨上がりに
雨のつぶを探して実際にのぞいてみてください。
いつもと違った目線で身近なものを見ることがで
きるかもしれません。



みんな ぜんぶ いろんな

中川ひろたか／文 奥田高文／写真
ブロンズ新社（2004.4）

「これはコップこれもコッ
プ…」、「これはとけい こ
れもとけい…」と始まり、
色、果物、動物、植物、人間
へと続いていきます。いろん
な種類のコップや時計、大き
なゾウや小さなテントウムシ
などのさまざまな生き物、そ
して最後にいろんな国の老若
男女の明るい笑顔が、鮮やか
な写真にシンプルな言葉が添えられて紹介され
ています。

表紙にはズラリと並んだドングリの写真があり
ますが、ひとつとして同じ色・形・大きさがな
いように、物にも生き物にもそれぞれの個性が
あります。

「ぜんぶいのち みんないのち おんなじい
のち」…このひとつひとつの短い言葉からは、
作者の「いのち」に対する温かい思いや、「い
のち」の尊さが伝わってきます。

